慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

| Title | 『アーサー王の死』 (1816年) の印刷者Robert Wilks : 未刊行資料から伝記的再構築の試み (その1) |
|-------------|--|
| Sub Title | A reconstruction of the life of Robert Wilks, the printer of Malory's Morte Darthur (1816) : part one |
| Author | 不破, 有理(Fuwa, Yuri) |
| Publisher | 慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会 |
| Publication | 2021 |
| year | |
| Jtitle | 慶應義塾大学日吉紀要. 英語英米文学 (The Keio University Hiyoshi review of English studies). No.74 (2021. 3) ,p.1-42 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Departmental Bulletin Paper |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030060-20210331-0001 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『アーサー王の死』(1816 年)の印刷者 Robert Wilks

――未刊行資料から伝記的再構築の試み(その1)

不 破 有 理

0. はじめに

1485年に英国初の印刷業者 William Caxton によって上梓されたサー・トマス・マロリー『アーサー王の死』(Sir Thomas Malory, *Morte Darthur*)は、今日知られている「アーサー王と円卓の騎士」の物語体系を、英文学史上初めて誕生させることになった。その出版の歴史は数奇な人間模様に彩られながら、現代なお、新しいテクストへと受け継がれている。

マロリーはアーサーの誕生から死までを独特の文体で語り、アーサー王 と円卓に連なる錚々たる騎士たち、ランスロットや甥ガウェインとその兄弟たちの愛情と憎しみ、アーサーと異父姉との息子モードレッドの壮絶な一騎打ちにいたるまで、読者は騎士たちの人生に引き込まれていく。19世紀初頭に絶大な人気を誇った小説家サー・ウォルター・スコット(Sir Walter Scott, 1771–1832)をして「至高の文体と最高の散文物語」と言わしめたゆえんである。

物語の魅力によって現代に至るまで伝えられてきたことは間違いない。

だが、その理由のみで500年以上の時空を生き抜いた事実を説明するこ とはできないだろう。1485年の初版以降、チューダー朝では5版のテク ストが刊行されたが、1634年を最後に18世紀には一度も出版されるこ とはなかった。1816年までマロリーのテクストの出版史は途絶えたので ある。言い換えれば、1816年のテクストがなければ、マロリーのアーサ ー王物語はアルフレッド・テニスンやラファエロ前派による輝かしいアー サー王伝説を題材とした作品群として誕生することはなかったといえる。 不思議なことに、ほぼ同時に2種類のマロリーのテクストが刊行された 1816年、2月に刊行されたのが2巻本ウォーカー版 (Walker)、数か月の 後れを取ったのが3巻本ウィルクス版(Wilks)である。いずれも袖珍本を 模したポケットにも入る小ぶりの版である。アルフレッド・テニスン (Alfred Tennyson, 1809–1892) が最初に接したであろうアーサー王物語が Wilks 版のマロリーのアーサー王物語であり、『国王牧歌』 (Idvlls of the King, 1859-1885) を生み出した最大の典拠がマロリーのテクストである。 19世紀以降のテクスト出版史でも絶大の人気を誇り、研究史上も重要な Globe 版の編者サー・エドワード・ストレイチー (Sir Edward Strachev. 1812-1901) が親しんだテクストも Wilks 版であった。

1816年の先行版 Walker 版については出版記録も保存されており、序文執筆者名も Alexander Chalmers と知られているのに対し、後発の Wilks 版に関する情報はきわめて限定的である。序文の著者及び編集にかかわった人物や印刷者の氏名すら確定していなかった¹)。当時の証言によれば、テクストの売り上げも Walker 版に水を開けられた状態だったという²)。本研究は、19世紀におけるアーサー王伝説復興に重要な役割を果たしたマロリーのテクスト刊行を担った印刷者・出版人に注目し、アーサー王復興の表舞台を支えた裏方の人々の生業を照射する試みである。本稿では1816年に89 Chancery Lane に居を構え、マロリーの『アーサー王の死』を世に送ったR.Wilks に焦点をあてる。名前さえも Richard か Robert か、はたまた別の名前なのか同定されていなかった。19世紀初頭にロンドンの一隅で印刷業

に携わった一市井の人は『オクスフォード英国人名辞典』(Oxford Dictionary of National Biography) に登場することもない。公文書や未刊行書簡から Wilks が生きた証を掘り起こしつつ、印刷業者として名が残る刊行物をてがかりに、印刷人 Wilks の前半生を描く、まずはその第一部の幕開けとしたい。

1. R. Wilks の ID を求めて: 89 Chancery Lane から

アーサー王伝説の復興を告げるトマス・マロリーの『アーサー王の死』が 1816 年に刊行された。その題扉には "Printed & Published by R. Wilks, 89 Chancery Lane" と印刷されている [画像 1]。Chancery Lane と呼ばれるこの通りは、名前が示すように高等法院 (High Court of Chancery) に歴史的由来があり、法曹関係者が多い地域として知られている。現在でも、その名と番地が残る [画像 2]。ロンドンの新聞業界の代名詞ともなったフリート・ストリート (Fleet Street) と、ホルボーン (Holborne) の間をほぼ南北に走り、国会議事堂や諸官庁があるウェストミンスター (Westminster) に通じる道筋でもある。『アーサー王の死』を初めて 1485 年に活版印刷したのはキャクストンだが、その弟子ウィンキン・ド・ウォード (Wykyn de Worde) もマロリーを二度印刷している。ド・ウォードは 1500 年に Shoe Lane に転居し "The Sun"を開店するが、その通りも Chancery Lane から近い 3)。

英国国立公文書館所蔵資料 (National Archives) によれば、1812 年、同住所 Chancery Lane で "Robert Wilks, Printer"の氏名と身分で火災保険の支払い証明の記録が残されている ⁴⁾。すなわち、1816 年版を印刷したR.Wilks の R は Robert であり、ゆえに印刷者の姓名は Robert Wilks と確定できる。英国出版業者目録によればロバート・ウィルクスの業種はPrinter, Bookseller, Printer (copperplate)、登録住所と期間は3箇所にわたり、"89 Chancery La(1802–30). 76 Fleet St(1825–7). 5 Bartlett's Bldg(1833–9)"と記録されている ⁵⁾。生没年はいずれの項目にも記載がない。



画像1 1816 年 Wilks 版の題扉 下方に R.Wilks と 89 Chancery Lane の表記が見える。

(画像 1 ~ 7 は筆者撮影)



画像 2 89 Chancery Lane

ウィルクスはどのような人生を辿ったのであろうか。これまで散逸していたパズルのピースを拾い集め、ウィルクスの人生を再構築する過程で、18世紀後半から19世紀中葉の英国における出版をとりまく知的風土と印刷工房の生業にも照射したい。

2. 未刊行書簡から読み解く

第11代 Norfolk 公への手紙と Wilks の署名という興味深い組み合わせの肉筆資料が現存している 6。 資料は2種類からなり、一つは請求書と領収書、もう一つは書簡である。いずれも Howard 家旧蔵資料である。請求書と領収書は左上で糊付けされ、6ペンスの郵便証紙が貼られている[画像3]。請求書の日付は1802年2月1日、以下のような仔細が記されている:



画像3

- [上] 1803 年 Duke of Norfolk 宛 の書簡表書き
- [下] 1802 年 Duke of Norfolk 宛 の請求明細書と領収書

His Grace the Duke of Norfolk

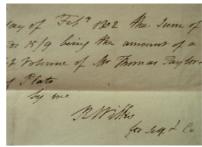
To Wilks & Taylor.

| 1802 | Printing Mr. Taylor's Translation of the Works | | £ | S | D |
|-------|--|---|-----|----|---|
| Feb.1 | of Plato: English with heavy Notes, Greek & c. | | | | |
| | No 500, Vol. I. 68 1/2 sheets, at 31/6 | | 107 | 17 | 9 |
| | Alterations in D^0 | | 2 | 18 | |
| | | £ | 110 | 15 | 9 |
| | | | | | |

"Mr Taylor's Translation of the Works of Plato" とはトマス・テイラー (Thomas Taylor, 1758–1835) による『プラトン著作集』の翻訳で、500 部印刷したことがわかる。折丁 D に変更があったらしく、その修正代として 2 ポンド 18 シリングが計上され、印刷用紙、印刷代金も含め、合計 110 ポンド 15 シリング 9 ペンスである。この請求書から 2 週間後の日付で領



画像4-1 1802年2月15日Duke of Norfolk 宛 Wilks による領収書 (幅 18 cm)



画像4-2 1802年2月15日 Duke of Norfolk 宛 Wilks による領収書 (拡大版)

1 行目に領収日, 3 行目に Thomas Taylor, 4 行目に Plato, 最後に "RWilks" の署名が見える。

収書が R.Wilks の署名入りで発行されノーフォーク公へ送付されているので、迅速に支払い事務が進んでいる様子がわかる [画像 4-1] [画像 4-2]。領収書の文面は以下の通りである。

Received this 15th day of Feb^y 1802 The Sum of One Hundred ten Pounds 15/9 being the amount of a bill for printing the first Volume of Mr Thomas Taylor's Translation of the Works of Plato,

by me

RWilks

for self & co.

Wilks が署名した領収書と一緒に綴じられていた請求明細書の透かし模様には "I TAYLOR 1798"の Watermark が見える [画像 5]。1816年に『アーサー王の死』を印刷した折には単独の印刷出版者だが,1803年当時, "RWilks for self & co." とあるように共同経営がいたことがわかる。

領収書のほかに同封されていた書簡の送り主は、透かし模様に刻まれて

いた John Taylor, 宛 先は Duke of Norfolk, 1803年5月12日付で ある。書簡の用紙の大 きさは9 inch × 7.5 inch (22.86 cm × 19.05 cm), "E & P1798"の 透かし模様入りの用紙 の右片面に書かれ,縦 に三つ折りされ,左側 に Duke of Norfolkの



画像 5 1802 年 2 月 1 日付 Duke of Norfolk 宛 の請求書の透かし模様 "I TAYLOR 1798"

宛名, 朱印の蝋で封印されている [画像 6-1] [画像 6-2] [画像 6-3] [画像 6-4]。以下, 全文を転写し引用する。

May it please your Grace

As the Partnership between myself and Mr Wilks, in the printing business is immediately to be dis-solved, I beg permission to solicit your Grace's patronage and favour, & that I may be continued as the Printer of the great Work carried on by your Grace's munificence, Mr Taylor's translation of Plato.

Should I be so fortunate as to obtain this very important favour, it shall be my Pride & Pleasure, as it is my Interest, to execute the work in so correct & neat a manner as shall be satisfactory to your Grace, and to second, as far as his in my power, the labours of the learned Translation to render the Work as perfect as possible.

I beg leave to subscribe myself Your Grace's most obed [ien]^t Serv[an]^t. John Taylor [signed]

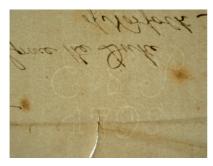
89 Chancery Lane May 12, 1803.



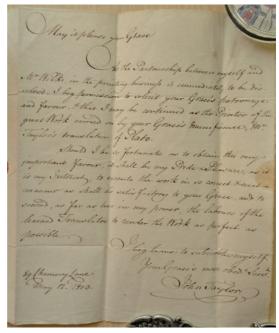
画像 6-1 1803 年 5 月 12 日付 Duke of Norfolk 宛の書簡(封蝋で 開かれた切り跡が見える)



画像 6-2 1803 年 5 月 12 日付 Duke of Norfolk 宛の書簡 全紙



画像 6-3 1803 年 5 月 12 日付 Duke of Norfolk 宛の書簡の透かし模 様 "E & P 1798"



画像 6-4 1803 年 5 月 12 日付 Duke of Norfolk 宛 John Taylor の 書 簡 全形

この手紙の主 John Taylor は Robert Wilks と 89 Chancery Lane で印刷業 を営んだ Richard Taylor の父親である。書簡の冒頭から「ウィルクスと のパートナーシップをただちに解消するため ("immediately to be dissolved"), たってのお願いの議がございます」と書き出しており、切迫感が漂う。実 際ウィルクスとの共同事業者としての契約解消の日が迫っていた。契約に よると、解消する場合には6か月前に申し出なければならない取り決め となっており、その日が1803年5月18日に迫っていたのである。書簡 の日付は 1803 年 5 月 12 日付で、まさに 1 週間を切った段階でしたため た書簡ということになる。ウィルクスとのパートナーシップ解消に際して 確保しておきたいのが、顧客である。続く文面には、「閣下の引き続きの ご支援とご後援をお願いしたい と恭しい文言が並び. これまでどおり 「トマス・テイラーのプラトンの翻訳出版の仕事は私に受注していただき たくお願い申し上げたき議であり、受注した暁には、必ずや閣下に気に入 っていただけるように精確に美しい仕上がりを目指し、偉大なる作品を完 全な形にすべく、力の及ぶ限り尽力いたします」と書き添えている。ウィ ルクスもノーフォーク公に嘆願の書簡を送ったかどうかは不明だが、少な くともジョン・テイラーは共同事業者の名前が変更になることに伴い、顧 客を失うことを恐れ、事前に行動に出ていた様子がわかる。

「偉大なる作品」とはトマス・テイラーによる『プラトン著作集』,Duke of Norfolk とは 11 代目ノーフォーク公チャールズ・ハワード (Charles Howard, 1746–1815) である。11 代目ノーフォーク公はアランデル (Arundel) 城の修復に莫大な財産をつぎ込み,その貢献もあり現代でもアランデル城は居城として使用されている数少ない歴史的建造物である。ノーフォーク公は最初の妻を産褥で失い,2番目の妻は精神を病み,3番目は名高い歴史家 Edward Gibbon の縁戚 Mary Gibbon を半ば公認の愛人とし6人の子をなす 7)。Horace Walpole からは「肉屋のようだ」と評されたノーフォーク公は,その風体は恰幅がよく家柄の高貴さとは裏腹に,優雅さとは程遠い装いとふるまいで知られた「酔っ払い公爵」で,大酒をめ

ぐる逸話にも事欠かない⁸⁾。とはいえ、Howard 家は 15 世紀から続く貴族の一門で、ことにヘンリー 8 世の 6 人の妃のうち、2 名を輩出したことでも知られている。Anne Boleyn と Catherine Howard である。ヘンリー8 世が処刑した妃 2 人が、残念ながらいずれも Howard 家に連なるとは、奇妙な因縁である。アン・ブリンはエリザベス 1 世の母であるので、英国王室の血を引く由緒正しい貴族であることにはまちがいない。

1815年6月ワーテルローの戦いの勝利の報がもたらされる数日前に、 アランデル城ではマグナ・カルタ制定800年を記念する盛大な催しが開 かれた。中世趣味的な鎧兜が飾られた広間には、Howard の分家を含め 74名の客人が一堂に会し正餐を供され、舞踏会には160名が招待された。 その様は19世紀の復古主義的「古き良き時代」の再現で、エグリントン 馬上槍試合 (Eglinton Tournament) を先取りした祭典である。エグリントン 馬上槍試合とは 1839 年に中世騎士道ロマンスに材を得てエグリントン伯 が復活させた余興だが、雨のため大混乱に終わりお笑いの種となった。ノ ーフォーク公のマグナ・カルタ記念式典で興味深いのは、この祭典で祝杯 をあげた相手は王ではなく、王に自由と民の権利を保障させた12名の貴 族であった点である。この宴会が開かれた6か月後の1815年12月に11 代目ノーフォーク公はこの世を去る。今際の際、死の床にありながら、最 後の告解の代わりに死の恐れを解く有効な書として40版を重ねた書 Charles Drelincourt の英訳 The Christian's Consolations Against the Fears of Death をパルメル (Pall-Mall) の本屋から取り寄せようとしたという。 この逸話が物語るのは、生来の破天荒さに加えて、愛書家の横顔でもある かもしれない。アランデル城の図書室は壮麗さで知られるがその設計をし たのはこの「大酒のみの公爵 | であり、シェイクスピアの初版フォリオ版 をはじめ、英国活版印刷本の収集家としても知られ、1812年の伝説的ロ クスバラ公 (Duke of Roxburghe) の蔵書競売に自ら参加している。19世紀 の中世趣味や書籍収集熱をノーフォーク公は早々に享受していたのである。 さらに、このロクスバラ公蔵書の競売を機にそれまで所在不明であったマ

ロリー『アーサー王の死』ド・ウォード (de Worde) 版が再発見され、19 世紀のテクスト校訂への道が開かれていく。アーサー王伝説復活の草創期 のテクスト編集にかかわった一人が Joseph Haslewood, 1816年の Wilks 版の編集者なのである。

ノーフォーク公はパトロンの顔も持ち、上掲の書簡からも明らかなよう に、ノーフォーク公の支援のおかげでトマス・テイラーの『プラトン著作 集』は出版されたのである。本書は、1804年にプラトンの未刊行の著作 をボドリアン図書館や大英博物館(当時)所蔵のギリシア語写本から直接 転写し、初めて英訳した点が画期的であった。トマス・テイラーはその後 も新プラトン主義の著作を次々と翻訳出版し、ウィルクスがその出版の一 翼を担うことになるのである。現代ではプロティノスら新プラトン主義の 著作の翻訳家として言及されることがあるものの. テイラーは古典学者と いうより神秘主義の思想家として評価されているようだ⁹⁾。当時は、パリ の 著 名 な ギ リ シ ア 語 学 者 か ら "vir in Platonicorum philosophia versatissimus"「プラトン哲学に熟知した人物」として評価されており¹⁰⁾. またその影響は英国ロマン派詩人コールリッジやブレイク、米国のエマソ ンにもおよぶという。エマソンは「米国の図書館にはどこでもトマス・テ イラーの翻訳が所蔵されている | と、テイラーの人気ぶりを次のように伝 えている。

Ralph Waldo Emerson, in his conversation with Wordsworth, has said:— "I told him it was not creditable that no one in all the country knew anything of Thomas Taylor, the Platonist, whilst in every American library his translations were found." 11)

先に引用したジョン・テイラーのノーフォーク公への請願書にもかかわら ず、トマス・テイラーによる著作の印刷の仕事はウィルクスの手元に残っ たようで、その後も重要な顧客としてテイラーの名がウィルクスの刊行物 一覧には繁然と輝いている。テイラーの仕事を手掛けるということは、ギリシア語の活字にも長けていることを示す。ロンドンに多くの印刷業者がいたが、ギリシア語やヘブライ語という言語の印刷を扱える業者は多くはなく、ゆえにギリシア語の植字工への支払いは高かったという 12)。

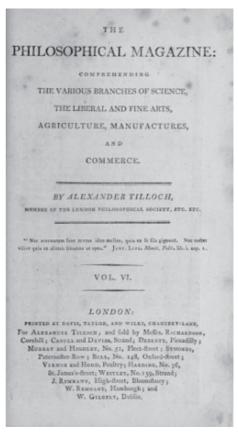
それでは、なぜジョン・テイラーとロバート・ウィルクス両者はパートナーを解消したのであろうか。まず両者のパートナーシップの成り立ちから確認したい。

3. Davis, Taylor, and Wilks

ウィルクスが英国出版業者目録に登場するのは Wilks and Taylor 両名の 名で1802年である。しかしながら、さかのぼること数年前1800年には Davis, Taylor, and Wilks の連名で少なくとも 6 冊刊行されている。その うちの1冊は『人口論』で名高いマルサス(Thomas Robert Malthus)の著作 An investigation of the cause of the present high price of provisions: by the Author of the Essay on the principle of population である。共同経営者の Davis とはユニテリアンのジョナス・デイヴィス (Jonas Davis, c1755–1827) で、ロンドンで印刷の修業を積み、スモレット (Tobias Smollett) の作品や Critical Review の印刷者として名高いアーチボルド・ハミルトン (Archibald Hamilton, 1719–93) の助手を務めた。1783 年からは 89 Chancery Lane で印刷店を構えた。Taylor とは先の書簡の主ジョン・テイラー (John Taylor, 1750–1826) で、息子 Richard Taylor (1781–1858) をデイヴィスの元 に住み込み見習いとして送り、リチャードは1797年3月から正式に弟子 入りが認められた。デイヴィスは1798年に科学雑誌 Philosophical Magazine の印刷を受注したので、見習いのリチャードは科学雑誌の印刷 の技術的土台を早々に培ったといえる。のちに自身が創設する出版社が Taylor & Francis である。いまなお Philosophical Magazine の版元をつと め、科学誌の出版社としても名高いことはつとに知られている¹³⁾。

デイヴィスは 1800 年頃には視力の衰えもあり印刷業から身を引く心づもりであった。 代わりに後継者として推薦したのが、ウィルクスである。 Chancery Lane からもさほど遠くはない Dean Street で働いていた若い印刷工という情報以外、詳細は不明といわれてきた 140。

1800 年 4 月 19 日 Davis, Wilks, Taylor の 3 者の名前で 契約を結び、1804 年まで年季 明けにならないリチャードの 代わりに父親ジョン・テイラーが約款証書を取り交わした。1800 年 刊 行 の Philosophical Magazine には 3 者の名が題 扉の London の下に刻まれて いる [画像 7]。デイヴィスは 1800 年の後半には引退、



画像 7 Philosophical Magazine 1800 年 6 巻表紙 三者の名が印刷されている

社名も Wilks and Taylor に変更, リチャードが 21 歳に達した年に父親から正式に代替わりをする予定であった。

上記の領収書の日付 1802 年は Wilks and Taylor として若い 2 人が船出し、事業も順風満帆かと思われる時期である。ところが、10 月 30 日付けの書簡でリチャードは父親ジョン・テイラーにウィルクスとの不仲と資金繰りがうまくいっていない状況を知らせる。父親はデイヴィスに相談し、デイヴィスは同年 11 月 12 日に以下のように答えている。

As for the two antagonists, they ought to know, and do know each other so well, that after deducting about one-half of their mutual accusations for self-partiality and prejudice, the rest, it is probable, may be safely depended on. Tell Richard I cannot help be angry with him for not conforming a little longer at least. ¹⁵⁾

デイヴィスから見ると、若い2人双方に落ち度があり、むしろ印刷所を任せて1年ほどしか経過していないにもかかわらずいざこざを起こしたリチャードへの不満を綴っている。以降も2人の状況は好転せず、1803年になるとリチャードは立て続けに父親へ手紙を書き送り、1月7日にはウィルクスが嫌われているため植字工がすぐにやめてしまうので、仕事が進まず困ると漏らし、3月には印刷所での乱闘騒ぎを実況中継さながらに語る。3月17日付の書簡である。

We have nothing but quarrels, now, between Wilks and his two apprentices. These disturb the peace of the house, but do not affect me. They were all three at it, with words and blows, for about half an hour this morning, and Mrs. Wilks came to beseech me to take her husband's part. Wilks has also been engaged in an absurd and unjustifiable quarrel with a journeyman; and has incurred some law charges without consulting me or saying a word on the subject till he wanted them entered in the Cashbook, which I would not do. ¹⁶⁾

ウィルクスが喧嘩した相手は徒弟奉公人2名,言葉の応酬からこぶしの 応酬へと変わり約30分,1対2で分が悪くなったと見たのか,妻がリチャードに夫の加勢を頼みにやってくる。かと思えば、ウィルクスは別の熟 練職人に言いがかりをつけ、勝手に裁判沙汰にし費用を引き出そうとした。 とリチャードは不平を訴える。19世紀初頭の印刷工房で繰り広げられた 喧嘩の真相は不明である。傍観者的立場であったリチャードだが、3月 26日になると矛先がリチャードに向けられ、状況は悪化、雰囲気はます ます不穏である。

I now write to you in a situation so disagreeable that you must excuse a strange letter. Mr. Wilks is walking up and down beside me in my room, which he refuses to quit, and my aunt [Livie] is sitting beside my fireside as my sole protector. Mr. Wilks's conduct with respect to considerable sums that he has received within the last few days has given me some uneasiness; he has refused either to give or to keep any account of monies which he receives; he has also shuffled off and procrastinated settling the books with me; and refused to give me an account book which I want, and which he has in his possession. He has received notes from Faulden, Phillips [publisher of *The Monthly Magazine*], etc., of the value of between £400 and £500, which he keeps in his hands. The immediate cause of the present unwarrantable conduct is this:- I went yesterday to settle an account of Mrs. Opie's with Longman and Rees; and when this was done, they, without my asking it, offered to settle with me our account for printing the *Lexicon*, for which, you know, about £480 was still due. I, of course, made no objection, and received a quantity of bookseller's notes at 6 months to the amount. When I came home I told Wilks of this and he evidently seemed much disappointed, and vexed that I had got them and said that I had better give them to him. I proposed being sent to our bankers, but to this he objected . . . After dinner I sent three times the servant to him for the book in which we enter bills, and he would not let me have it. This morning he came and asked again for the bills, and I asked for the bill-book . . . This he refused repeatedly and I got nothing by my expostulation but grosser insults than I

had ever before received . . . [he] called me a curst villain, a liar, an undermining scoundrel, and a thief; began to throw all my books and papers etc., about the room; and evidently tried to provoke me to violence. I called out of the window for someone to fetch Aunt. She came directly, and her presence, at least put a stop to all violence, but that of the tongue. ¹⁷⁾

印刷の仕事の依頼はあるものの、現金の流れが安定していなかったようで、 ウィルクスは資金繰りに苦労したようだ。事のきっかけはリチャードが取 引先から偶然受領した手形をめぐっての応酬である。Lexicon の印刷代と して Longman and Rees から 480 ポンド受け取ったことをウィルクスに 報告すると、明らかにウィルクスは落胆した様子で、リチャードが銀行に 預けるように進言するものの、ウィルクスは反対し、帳簿の開示も拒否し て見せようとしない。翌朝. 再びウィルクスは受け取った手形を渡すよう に迫り、リチャードは帳簿を見せてほしいと言い返すと、暴言の数々が飛 び出してくる:「呪われた悪党、嘘つき、人を陰険に傷づける奴、泥棒」 リチャード曰く、「こんな暴言を浴びせられたことは初めてだ」さらに、 暴言に飽き足らず、部屋にある本や書類を手あたり次第投げ始めたウィル クスに対して、身の危険を感じたリチャードは同じ Chancery Lane に住 む伯母を呼びにやり、なんとかその場は事なきをえる。騒動を知った父ジ ョンが帳簿にはきちんと記載するようにとウィルクスを諫めるが、かえっ て火に油を注いだようで、ウィルクスの書面からは喧嘩の余韻が伝わって くる。この騒動に駆けつけた伯母とはリチャードの母の姉 Ann のことで、 John Livie と結婚し同じ Chancery Lane に住んでいた。大騒動である。

1803 年 3 月 30 日ウィルクスが父親のジョンに書き送った手紙によると、リチャードに手形を見せるように言ったのは請求書類の日付と突き合わせるためであったにもかかわらず、リチャードが頑なに見せないのであって、それについて非難するのはおかしいと述べ、リチャードは "always some trifling engagements on his hand" と、見習いであったリチャードの仕事

ぶりへの不満も漏らしている。リチャード側の言い分とウィルクスの言い 分には齟齬があるが、ウィルクスはリチャードが弁護士2人と伯母に相 談し、彼らの助言に従って手形を父親ジョンへ送る決定を自分に知らせず に行ったことへの怒りが記されている。書簡ではウィルクスの疑心暗鬼の ことばが続く。「貴殿もご子息と共謀して、恥ずべき不当な所業を、事態を 混乱させ私を傷つけるためになさっているのか、あるいはご子息が奇矯に も貴殿をごまかし、貴殿がご存知ない不当な行為を行っているかのいずれ かでありましょう | ("Sir, you in conjunction with your son are doing dishonourable and unjust things in order to perplex the concern, and injure me, or that your son is strangely deceiving you, and acting an unjust part without your knowledge...") 18) さらに、ウィルクスはテイラー父子に不信感を募らせ、怒りが込み上げて きたのか、またもや罵詈雑言が始まる。「貴殿の息子は若者の中でも下劣 きわまりなく、彼の伯母は女の中でも最低 | ("Your son, Sir, must be the vilest of young men, and his Aunt the vilest of women")。 先のノーフォーク公宛のジョ ン・テイラーの書簡はまさにこのような騒動の間を縫って書かれたものだ ったことになる。

テイラー親子は共同経営の関係解消にむけて動き出し、1803年5月に は具体的な条件が整う。財産目録の1296ポンド相当額の活字と債権を両 者で分割し、89 Chancery Lane の使用権はウィルクスが譲渡を受けると 取り決めたが、事は容易に進まなかったようだ。ウィルクスはおそらく関 係解消を望んでいなかったのか、あるいはよりよい条件を引き出そうとし たのか、債券の評価額に不満を申し立て再交渉、結果的に11月には債権 と債務を762ポンドずつ分割することでなんとか合意を結ぶ。それでも 依然くすぶっていたようで、1805年に重ねてパートナーシップ解消を正 式に London Gazette の 3 月 12 日号で発表している。

The Partnership formerly subsisting between Robert Wilks and John Taylor, of Chancery-Lane, in the County of Middlesex, Printers, was dissolved on the 18th Day of May 1803. Dated this 6th Day of February 1805.

Robert Wilks. John Taylor.

『ロンドン・ガゼット』には破産管財人の告知や共同事業解消の公示など 掲載されているが、実際の解消と公示にウィルクスとテイラーのように2 年近く間が空いているのは通常とはいえない。関係解消にはかなりの労苦 を伴った様子がうかがえるだろう。告知文にある共同事業者 John Taylor が本稿上掲の書簡執筆の主だが、このテイラーはノリッジ(Norwich)の名 家の一族に連なる人物である。

ノリッジのテイラー家は 18-19世紀のイングランドの「知的エリート 階級」(intellectual aristocracy) と呼ばれる名門で 19), 非国教徒で急進, 自由 主義を標榜し、同名の祖父ジョンは自らヘブライ語のコンコーダンスを編 纂し1754年に刊行するなど著名な神学者として知られている。1756年 には、メソジストの指導者ジョン・ウェスリー (John Wesley) が「ヨーロ ッパでもっとも優雅な集会堂」と評するオクタゴン・チャペル(八角堂の 礼拝堂は現在もユニテリアン・チャペルとして現存する)が創建されるが、その建 設の礎を築き、牽引をしたのが、ジョン・テイラーであった。建設資金は、 富裕な羊毛業者が多かったノリッジの会衆から賄われた。テイラーは神学 者としてのみならず、伝道者としても地元の絶大な信頼を得ていた証であ ろう。このジョンの孫にあたるのが、リチャード・テイラーの父ジョンで ある。John Taylor (1750-1826) は羊毛業のかたわら、オクタゴン・チャ ペルの執事をつとめ、1784 年には従兄弟の Philip Meadows Martineau と 協力してノリッジの図書館を建設し地元ノリッジに貢献したのみならず、 国政においても地元羊毛業者を代表して、時の首相 William Pitt ヘロビー 活動を展開するなど、政治の舞台でも活躍した人物だった。The Linnean Society の創設者でユニテリアンの植物学者ジェイムズ・エドワード・ス

ミス (James Edward Smith,1759–1828) はテイラー家と親交が深かった。息子 リチャードが印刷者としてロンドンで経験を積む後押しをしたのもスミス の尽力が大きい。母 Susannah (1755-1823) は教養深く、ノリッジの知的 サークルを静かに見守る存在で、「きわめて知的で、物腰のさりげなさ、 針仕事をしつつ物静かながらも、深い知識に裏付けされた会話 | が印象的 だったようだ。そのような父母と環境で育ったリチャードがウィルクスと ロンドンの印刷工房、のちに『アーサー王の死』が印刷される Chancery Lane で共に過ごした時期があったのである。

Chancery Lane を離れ、リチャードが転居した最初の住所が 1 Black Horse Court, 1805 年に移転したのが 38 Shoe Lane, ド・ウォードが店を 構えた同じ通りである。ウィルクスから離れたリチャードは朝5時から 夜11時まで働いても働き甲斐があると書き綴っている。父と同じくユニ テリアン教会の会員になったこと、またデイヴィスがスミスから請け負っ ていた Philosophical Magazine の印刷を受注できたことに嬉々とした様子 が見て取れる。1807 年には 966 枚ものカラー図版付きの Flora Graeca や Francis Douce の *Ilustrations of Shakespeare and of Ancient Manners* を上 梓し、一躍、精密印刷の評判を獲得することになった。一方、「ウィルク スは」と、そして Taylor & Francis 社史の著者は記す、「Society of Arts の印刷を受注してはいたものの、それ以外は歴史から姿を消した」と ²⁰⁾。 しかしながら、ウィルクスは姿を消すどころか、『アーサー王の死』を 1816 年に Walker 版に後れは取ったものの. 世に送り出すことになるの である。

4. Robert Wilks の徒弟時代

ウィルクスがジョナス・デイヴィスやジョン・テイラーと共同事業者と なる以前の経歴は、これまでまったく知られていなかった。デイヴィスも テイラーもユニテリアンであることから、おそらく共同事業者として推挙 したウィルクスもユニテリアンのつながりがあったか、進取の気性をくみ取れる人物とデイヴィスの目には映ったのではないか。テイラーが活動拠点としていたノリッジは言論の規制強化が懸念される時期であっても自由主義が失われておらず、1789年には1689年の名誉革命100年を記念し、ユニテリアンに信教自由令の拡充によって政治的立場の復権を求める機運が高まっていた。テイラーは「ホイッグ党と自由主義の断固たる支持者」²¹⁾として知られ、1789年には作詞「自由の賛歌」を発表、1793年に英仏戦争が勃発した中でも市民の権利を尊重する革命と自由の旗を掲げていたのである。のちにジョン・テイラー父子と喧嘩別れとなるウィルクスだが、このような時代精神を共有する人物のもとで、徒弟奉公に入っていたことが今回の調査で判明した。

当時の英国はフランス革命という対岸の火事が飛び火することを恐れ、政府や世論はともに 18 世紀後半から急速に保守化しつつあった。アメリカの独立を支持し、フランス革命が標榜する平等や人権を主張するのは反愛国的とみなされ、トマス・ペイン(Thomas Paine、1737–1809)の Rights of Man (1791)を印刷刊行した者は処罰され投獄された。そのような状況下のロンドン出版界で活躍した人物、John Almon (1737–1805)がウィルクスの親方であったのである。ジョン・オルモンは John Wilkes (1725–1797)の友人として知られ、共に英国議会の議事録の一般公開に道筋をつけた人物である。ジョン・ウィルクスは「ロンドンの歴史上最も輝かしい市長」²²⁾と称された経歴の政治家で、食料品価格の規制や囚人待遇の改善、買春反対運動を展開するなど当時の政治の舞台で華やかな活躍を見せる。ウィルクスがこのオルモンに徒弟入りしていたことがわかる文書が、幸運なことに存在していた。両者の間で取り交わされた年季奉公証文である [画像 8]。貴重な文書なので以下、全文を転写し引用する。イタリックは手書きの箇所、スラッシュ/は段落の区切りを示す。

This Indenture Witnesseth, That Robert / Wilks Son of John Wilks late of /



画像 8 Robert Wilks の年季公証文 London Metropolitan Archive; Reference Number: COL/CHD/FR/02/1236-1243

Saint Giles Cripplegate deceased / doth put himself Apprentice to John Almon Citizen / & Glover of London —to learn his Art, and with him (after / the Manner of an Apprentice) to serve from the day of the date / hereof------ unto the full End and Term of ------ Seven Years from thence following, to be fully / complete and ended. During which Term the said Apprentice his / said Master faithfully shall serve, his Secrets keep, his lawful Commands every where gladly do. He / shall do no Damage to his said Master, nor see it to be done of others, but that he, to his / Power, shall let or forthwith give Warning to his said Master of the same. He shall not waste / the Goods of his said Master, nor lend them unlawfully to any. He shall not commit Fornication, / nor contract Matrimony within the said

Term. He shall not play at Cards, Dice, Tables, or any / other unlawful Games, whereby his said Master may have any Loss. With his own Goods or others, / during the said Term, without Licence of his said Master, he shall neither buy nor sell. He shall not / haunt Taverns, or Play houses, nor absent himself from his Master's Service Day or Night unlawfully; / But in all Things, as a faithful Apprentice, he shall behave himself towards his said Master, and all / his, during the said Term. And the said Master, in consideration of the Sum of one / Penny being the Money given with the said Apprentice, his said Apprentice, in the same Art and Mystery / which he useth, by the best Means that he can, shall Teach and Instruct, on cause to be taught and / instructed; finding to his said Apprentice, Meat, Drink, Apparel, Lodging, and all other Necessaries, / according to the Custom of The City of London during the said Term. And for the true / Performance of all and every the said Covenants and Agreements, either of the said Parties bindeth / himself unto the other by these Presents. IN WITNESS whereof, the Parties above-named to these / Indentures interchangeably have put their Hands and Seals, the Twenty eighth Day of / June in the Twenty fifth Year of the Reign of our Sovereign Lord / George the Third of Great Britain, France, and Ireland, King Defender of the Faith, & c. Anno Dom. 1785

```
Sealed and delivered
in the Presence of
[signed by two]

RFinch John Almon
```

Sold by WILLIAM CHAPMAN, Stationer, in King Street, Cheapside.²³⁾

この年季奉公証文から、これまで霧に包まれていた Robert Wilks の人生 の一部が明らかになる。父は John Wilks, 住所は Saint Giles Cripplegate, すでに死去しており、Robert は The Glover of London に所属する John Almon Citizen の元に徒弟として 1785 年 6 月 28 日に年季奉公に入った 事実が判明する。証文には該当者名と年月日. ロンドンのギルド名が手書 きで記入するように印刷されており、最後に関係者が署名を交わす書式で あることがわかる。親方と徒弟それぞれへの務めと心構えが印刷されてお り、大変興味深い。通常の徒弟開始年齢は15歳、期間は7年で、年季奉 公の期間中親方は衣食住一切の面倒をみる務めを負う。代わりに、徒弟は 親方の秘密を守り、忠実に仕え、損害を与えてはならず、損害を与えるよ うな行為を見た場合は親方に知らせること、親方の財産を無駄にしてはな らず、他人に貸してはならない、親方の許しなしに売り買いをしてはなら ないと禁止事項が続き、さらに期間中に妻帯を禁じ、姦淫すべからず、博 打をすべからず、飲み屋や芝居小屋に徘徊すべからず、勤めに遅れること なかれ、等々の行動を戒めることばが並ぶ。裏を返せば、徒弟の中には飲 み屋にはびこり、博打に血道をあげ、修業を怠るなどの輩がいたのであろ うし、教育にはさぞや苦労を伴ったのだろう。しかしジョン・オルモンは ロバート・ウィルクスを引き受けるにあたっては1ペニーしか受け取っ ていない。おそらくウィルクスの父親がオルモンの友人 John Wilkes とほ ぼ同名であったことから、名目上1ペニーを受け取ってウィルクスを引 き受けたのではないか。

本来なら、7年の年季奉公であれば 1792 年に年季明け Freeman となる はずである。しかしオルモンはウィルクスが徒弟に入った翌年1786年に 名誉棄損の罪を着せられ身柄を拘束、裁判では政府の回し者の弁護士しか つけられず、フランスへ逃亡し追放の身となる²⁴⁾。1792年に帰国後、王 座裁判所の牢獄に1年間投獄されると、ロンドンの新聞は一斉に政府へ の抗議を書き立てた。オルモンが 182–183 Fleet Street に店を構えたのが 1784年なので、ウィルクスの徒弟修業はフリート・ストリートで始まり、

このような時代の政治が渦巻く中で徒弟生活を過ごしていたのである。だが徒弟に入るなり、親方が裁判にかけられ国外追放となってしまうわけだから、印刷技術や親方業をオルモンから学ぶのは難しかったであろう。ジョナス・デイヴィスが自分の後継者として「Fetter Lane はずれの Dean Street の若い印刷者」²⁵⁾ であるウィルクスを選び、ジョン・テイラーとの共同事業に推薦したということは、すでに一定の訓練を受け、徒弟奉公は終了していたはずである。実際、今回の調査によると、1800年にオルモンと同じく The Glover's Companyのマスター(親方)として登録されていたことが確認できた。親方が不在となった1785年から1800年の空白期間は、おそらく他の親方が引き受けたのか、あるいはオルモンの印刷工房の留守を預かった人物から技術指導を受けた可能性もある²⁶⁾。いずれにせよ、通常7年で年季明けになるはずが15年にも及んでいるのは、18世紀末に出版者を政府が取り締まった不穏な時代の余波をウィルクスがまともに受けたことを物語っている。

5. 窃盗事件と証言から

さらにロバート・ウィルクスの実像に迫る資料として、裁判記録が存在した。これまでウィルクスの印刷工房内部の詳細は明らかではなかったが、訴状の中に思いもかけずウィルクス自身の言葉で語られているのである。裁判記録に 1809 年と 1828 年、いずれも窃盗の被害者としてウィルクスが登場する ²⁷⁾。本稿では 1809 年のみ扱い、次稿でウィルクスの後半生をまとめたい。

起訴者はウィルクスで、強盗事件の被疑者は2名、事件は1809年9月6日の深夜12時頃、ウィルクスの住居に侵入し、紙19リーム (ream、「連」)50ポンド相当の財産を窃盗した疑いで、ジョン・ウィリアムズとダニエル・ブラッケンが起訴された。冒頭にウィルクスが陳述する。質問者Qは裁判官である。

ROBERT WILKS. On the morning of the 7th of September, about three o'clock, I was called up by the watchman, who told me that my warehouse and printing office doors were both open. The property was missing both from my warehouse and the printing office.

Q. How are they connected with the house, be so good as to describe the situation of your dwelling house –

WILKS. The dwelling house is connected with the printing office; the back door goes into the yard, and then you ascend a small flight of steps into the printing office; they are distinct buildings, but in the same yard, we go from one to the other without going into the street. On searching the premises with the watchman I discovered that the robbers, by removing a pane of glass in the warehouse window, where the paper was, had opened a window and got in; they forced the warehouse door open and got into the printing office. I did not at the moment discover what was gone. On the next day I received information that some paper had been stopped in a coach and the property taken to St. James's watchhouse. On my going to the watch-house I found that it was part of the property that had been stolen from me.

Q. Had you, prior to your going to the watchhouse, discovered what paper you had lost -

WILKS. Yes. The robbery was on Thursday morning; on Monday I had forty reams of <u>royal printing paper from Messrs</u>. Fourdrinier, nineteen of which I discovered were stolen; it was <u>not paper much in use</u>; it was of <u>particular quality and make</u>; Messrs. Fourdrinier have a patent for it; it is <u>made by a machine</u>; the marks of the wrapper are F Y R. On looking at the paper at the watch-house I compared it with the paper left behind, it is completely the same.

Q. What were the quantity of reams shewed you –

WILKS. Six reams. Since which I learned that the remaining part were sold to Mr. Denham in Broad-street, the day after the robbery; I lost nineteen reams, and we have recovered above eighteen reams.

Q. What means have you of knowing that paper was there the night before - when had you the last view of the paper or any body else, so as to know the paper was there -

WILKS. I had no view of the paper. On the Monday the prisoner Bracken was the warehouseman, he had the key of the warehouse; I knew the paper was there, it came in late on the Monday evening; I saw Bracken bringing it up from the cart to be put into the warehouse; I certainly saw it in the warehouse the day after, or else I asked him. Out of these forty there were nineteen taken away and twenty one were left behind in that warehouse. (下線は筆者)

ウィルクスの弁によると、1809年9月7日の早朝3時ごろに夜警に起こされ、倉庫と印刷所のドアが開いているとの連絡を受けた。被害状況を報告するウィルクスの言葉から、89 Chancery Lane がどのような配置の印刷所であったのかが明らかになる。印刷所と住まいは近接しており、異なる建物だが、裏口から庭を横切り階段を数段昇ると印刷所へ入ることができる構造で、表通りに出ることなく庭(ヤード)でつながっている。強盗は倉庫の窓ガラスを1枚外して侵入、倉庫の扉をこじ開け、倉庫に保管されていた紙を印刷所から運び出した模様。この説明によれば、倉庫は印刷所と隣接しており、通りに面した扉があるのは印刷所で、その扉から逃走したという流れのようだ。

ウィルクスの被害の説明によれば、強盗が押し入ったのは木曜の夜更けで、月曜の夕刻に仕入れたばかりの印刷用紙を盗まれたという。倉庫の鍵も持っているのはブラッケンで、紙を40連倉庫に納品したところを自分

は確認したと説明するが、事実関係に加えて、紙の蘊蓄を語る。「この用 紙は通常あまり用いられることがない Messrs. Fourdrinier 特製のロイヤ ル紙で、包装紙には FYR のイニシャルが刻まれており、紙は機械織で、 製造機に Fourdrinier は特許を取っている」。 窃盗内容とは直接関係のない 印刷の専門知識を開陳してしまうウィルクスに、印刷へのこだわりが垣間 見える瞬間である。

Messrs. Fourdrinier & that Henry (1766–1854) and Sealy (1773–1847) Fourdrinier 兄弟のことで、フランスの印刷・出版業の一族 Didot 家の Léger Didot (1767-1829) から財政支援を受け、1801 年からロンドンで長 網抄紙機の開発を開始した。実際に機械の技術開発を担当したのは缶詰の 発明でも有名な英国技師 Bryan Donkin (1768-1855) だったらしい。ドン キンは1803年には試作品を完成させ、1807年には現代の製紙機械の基 本が出揃ったフォードリニア (Fourdrinier) 製紙機の製造を開始する ²⁸⁾。 ウィルクスの口ぶりから察すると、このような新しい機械と新しい製紙情 報を得ており、かつまた率先して取り入れようとしている姿勢が読み取れ る。実際、ウィルクスの言葉通り、フォードリニアは 1806 年 7 月 24 日 に特許を取得している。ただし、製造開発の高額コストがたたり、1810 年には破産の憂き目を兄弟は見ることになるのだが。

ウィルクスの証言から19世紀初頭に出回り始めたフォードリニア製の ロイヤル判を使用していたことが判明した。書誌学的分析研究には書物の 印刷用紙の種類やサイズなどの情報が重要だが、特定する手掛かりは紙の 透かし模様の種類や鎖線とよばれるすき簀の編み糸の鎖状の線の方向や折 丁記号などで、書物に残る痕跡を探す作業となる。200年近い前の書物で は痕跡が得られにくいことも多く、この裁判記録のように印刷者自身が残 した言葉は貴重である。

事件があった 1809 年当時、ウィルクスが準備を進めていたはずの印刷 物は、『プラトン著作集』の出版以来の顧客であるトマス・テイラーによ るアリストテレス関連の著作 The History of Animals of Aristotle, and his

Treatise on Physiognomy, translated from the Greek, 29) あるいは 1810 年刊 行 The treatises of Aristotle on the parts and progressive motion of animals, his problems; and his treatise on indivisible lines / Translated from the *Greek.* To which are added, the elements of the true arithmetic of infinites, $&c.^{30}$ である可能性が高い。紙代は高額で、当時の印刷費用に占める割合 が高いため、在庫は避けたいという思いが強い310。特殊な印刷用紙を40 連仕入れるのはかなりの決断である。1連は英国では516枚、それを40 連を購入するとなれば、印刷予定がなければ購入するとは思えない。冒頭 で引用したウィルクスの領収書にもあるように. 『プラトン著作集』と同 様500部刷る予定であれば、いずれも500ページ程度の大分な著作なので、 その印刷には妥当な数量であろう。ちなみに被害額50ポンドは現代の貨 幣価値では 4.130 ポンドに相当する 32)。 出版業には販売前に負担しなけ ればならない高額の必要経費があるため、親方には経営の才が求められる のである³³⁾。またなによりも、紙が紛失してしまうと予定していた印刷 工程に支障が出てしまう。ウィルクスが盗難に遭った印刷用紙を必死に回 収し、犯人探しに躍起となるには十分理由があったのである。

この事件の展開の記述で興味深いのは、倉庫に搬入したばかりの大量の印刷用紙を、通常の価格より安価に購入した印刷業者が登場することである。Broad Street の印刷・出版業(printer, stationer)Denham という人物が証言する。「9月7日の午後1時から2時の間に、見かけぬ人物が1連のロイヤル判用紙の売り込みに店にやってきて、購入を希望すると、9月7日の夕方に荷車で紙束を運び込み、11連に6ギニ支払った」という。裁判官が「11連の用紙の値段は通常いくらか」と尋ねられ、「26-27ギニ」と答える。裁判官が重ねて「まっとうな品だと思ったのか」と問うと、「その時、その用紙の価値がわからなかった」と Denham が答える。即座に横からウィルクスが「私はその紙に1連55シリングも支払ったぞ!」と思わず(!)を追加したくなるような口をはさんでいるのである。上質紙の価値を知らない同業者への苛立ちもあったのか、あるいはウィルクス

が支払った正規価格の5分の1程度で購入した印刷者への怒りであろうか。 盗品と知りながら格安に用紙を手に入れる印刷者もおそらく存在していた のであろう。対して、ウィルクスは被害者側であり、強盗が目をつける程 度の資産をもつ印刷・出版者とみなされていたとも推測できる。

仕入価格を抑え印刷代を浮かせ価格を下げる出版業界の競争は18世紀 にはすでに存在した。価格競争において勝者となる才はウィルクスにはあ まり持ち合わせていなかったようだ。1816年版『アーサー王の死』を出 版した際にもライバル版が9シリングであったのに対し、Wilks 版は12 シリングで、3シリングも高かった。売れ行きはもちろんライバル Walker 版が Wilks 版をしのいだのはいうまでもない。

■事件のあらまし

裁判記録に則しつつ、少々戯曲風だが、登場人物と状況を整理したい。

時: 1809 年 11 月 1 日 第 8 開廷 場所: Old Bailey 中央刑事裁判所

裁判官: Lord Ellenborough

事件発生目時: 1809 年 9 月 6 日深夜

被害発生場所: 89 Chancery Lane

起訴人: Robert Wilks

Daniel Bracken Robert Wilks の倉庫係 被疑者1:

被疑者 2: John Williams Mrs Elizabeth Storey の御者

証人喚問に登場する人物

夜警1: Andrew Fisher

街燈点灯夫: Thomas Appleford 夜警 2: William Chapman

夜警 3: John Calahan Mrs Elizabeth Storey 被疑者 John Williams の雇用者

Denham 印刷·出版業者

William Cook Robert Wilks の徒弟

John Williams への証人

James Storgis 乗合馬車の御者

Nehemiah Bricknell ウィリアムズの知人

William Mead 同上

Daniel Bracken への証人

John Rivers 印刷業者

その他 Williams への証人 2名 その他 Bracken への証人 3名

夜警 1: Andrew Fisher 事件発生時の9月7日朝, 馬車の目撃者 Hopkins street にいたところ, 177番の馬車が近づいてきた。別の通りに入ろうとしたが曲がりきれず, 柱にぶつかってしまい, 私に助けを求めた。街燈点灯夫も横にいた。馬車をもとに戻そうとしていたところ, 他に2人の夜警が Wardour Street からやってきた。そのうちのひとりが馬車の御者を見て, 自分の巡回地域をうろついていた奴だといい, 馬車の中を確認したところ, 紙があった。一緒に夜警の詰め所に来るように言ったところ, 馬車を戻す助けをするふりをして, その男は逃げ出した。St James's の夜警の詰め所に馬車を移動させた。車内には6連と2連合計8連の紙があった。

裁判官:2種類の紙を紛失したのか。

Robert Wilks: 19 連以上もなくなっていた。判事から損害届には 19 連と届ければ十分だと言われた。

紙の「種類」を尋ねられて「数」を答えるウィルクスは、被害の痛手を強 調したい気持ちが先走るのか、判事に言われたように届を出しただけと、 言外に不満感が漂う。次の証人、街燈点灯夫 Thomas Appleford は夜警1: Fisher と一緒にいたが、裁判官が事故現場の御者は被疑者ウィリアムズだ ったのかと尋ねると、Appleford は「自分の知る限り本人だと思う。馬車 番号は177だった」と回答する。「事故を起こし、馬車の中に盗品の紙を 残し、逃走した犯人はウィリアムズなのか」という点を裁判官は確認しよ うとするのだが、証人 Appleford は「馬車番号 177 の御者がウィリアム ズなので犯人に違いない」という論理に終始する。さらに証言は続く。

Appleford は夜警の詰め所に盗品の紙を預け、馬車を Green yard に移 動中、ピカデリーで呼び止められ、馬車が Mrs Storey の持ち物であると 告げられた。Coal yard, Drury Lane に馬車を届けると、Mrs Storey は馬 車がなくなったと自分の御者が言いに来たので、探しに行けと今しがた。 命じたところだという。Appleford が夜警の詰め所に戻ったところ、馬車 を探しに出かけたウィリアムズがいた。夜警から逃走した男かと尋ねられ、 Appleford がそうだと答え、ウィリアムズが拘束された。ウィリアムズは 酔っぱらっていた。そこで裁判官が質問する。

裁判官: 馬車が事故を起こした時に乗っていた御者は酒気をおびて いたか。

街燈点灯夫:酔っていなかった。夜警の詰め所にいた男はヘロヘロ だった。

はたして馬車の事故発生時に177を運転していた男はウィリアムズなのか、 事故を起こした男は素面だったが、Appleford が詰め所に戻った時に見た 男[=ウィリアムズ]は酩酊していた。Applefordが詰め所に戻るまでの 間に酩酊するほど飲酒する時間があったのだろうか。

ここから別の夜警の目撃証言に移り、時刻の情報が加わる。

夜警 2: William Chapman 見回り中に不審者発見

夜中の1時半、Tyler's Court の端に貸馬車が止まっていているのをみつけた。中庭を見回り、戻ってきた時にもまだ馬車は止まっており、馬車に1、2名入るのを見た。

Tyler's Court とは、ほぼ南北に走る Wardour Street と Berwick Street を東西に結ぶ路地に立つ建物が囲む中庭である。最初に馬車 177 が事故を起こしたところを夜警 1 に発見された現場 Hopkins street と、このTyler's Court は 160m ほどしか離れていない至近距離である。夜警が見つけた貸馬車の御者は「St Ann's に行ってジンを飲むんだ、5 シリングもらえるし、お金はほしいさ」と言ったという。5 シリングと 3 度繰り返していた、と夜警 2 は証言。ジンといえば社会階級の低さと不道徳さを連想させ、ウィリアム・ホガースの版画『ジン横丁』(1751) はジンの悪弊を描いたことで有名だ。強い酒なので、短時間で酔うことができる。ウィリアムズはジンを飲んだのか。

裁判官:その御者はウィリアムズか。

夜警 2: William Chapman

その時はわからなかったし、馬車の番号もみなかった。

裁判官:後になってもその人物が同じ人物とは思わなかったという ことか。

夜警 2: はっきりはわからないが、服装は似ていると思った。顔は見なかった。ただ、5シリングと 3 度言い、St Ann's に行ってジンを飲むんだと言った。

どうも、ジンと5シリングにこだわっているようだ。さらに怪しげな状

況の目撃証言が続く。

45 分ほどして、Princess Street 方面に先の馬車が走り去った方向 から、静かに馬車が入ってきた。同じ馬車が戻ってきたのかと思っ た。Tyler's Court の門に入って見たら、馬車は中庭の反対側にいた。 すると「急げ、早くしろ」と、建物の中に呼びかける低い声が聞こ えた。その時に馬車の番号を確認すると 177 だった。

裁判官: Tyler's Court から走り去った馬車の御者と戻ってきた馬 者の御者は同一人物か

夜警2:そう思った。声が同じだと思った。馬に向かって「さあ家 に帰るぞ | と言っていた。

尋常ならぬことが起こっていると察し、もうひとりの夜警 3: Calahan と 一緒に付近を見回り、Hopkins Street にきたところ、例の馬車の事故現場 に遭遇したわけである。そこには夜警 1:Fisher と街燈点灯夫 Appleford と御者ウィリアムズがいたという。

裁判官:177の御者は前に見た御者と同一人物だったか。

夜警2:最初は、前に見た御者か確信は持てなかったが、馬車で見 た男に間違いないと思った。

過去形で語っていたのが、自分が御者の襟元をつかんだので、「その相手 は刑事被告人ウィリアムズで、その前に出会った人物に間違いない」と現 在形に変化し、最後に断言する: "I am quite sure the prisoner Williams is the man, and whom I have seen on the two former occasions."曖昧な記憶 が徐々に確信に変化していく。しかも新事実が見つかったわけでもなく誤 った確信でありながら、ウィリアムズの有罪説が濃厚になる。しかしウィ

リアムズにとって幸運なことに、最後に夜警3: John Calahan が登場する。

裁判官:馬車のそばにいた男は刑事被告人ウィリアムズだったか。

夜警 3: John Calahan

ウィリアムズが同一人物とは断定できない。

■ウィリアムズは有罪か否か

裁判記録の最後にウィリアムズの友人、知人が次々と証言に立つ。St Bartholomew Fair で 11 時から 12 時までウィリアムズとポートワインを飲んだという乗合馬車の御者 James Storgis の証言(つまりジンは飲んでいなかった)、1 時に姿を見かけたという Nehemiah Bricknell、12 時から 1 時の間に一緒にいたという William Mead の証言、いずれもウィリアムズのアリバイを示す重要な証言である。しかし奇妙なことに裁判官が「ウィリアムズは聖バーソロミュー・フェアに行くと聞いていたか」と雇い主 Mrs Elizabeth Storey に尋ねると、答えて曰く、「いいえ、一言もそのことは聞いていません」(!)。Mrs Storey の怒りがいまだ伝わるようだ。おそらく生真面目な女性雇い主には隠れて聖バーソロミュー・フェアに行き、つい深酒をしてしまい、その間に馬車を盗まれ、ついには身柄を拘束されてしまったのだろう。酩酊したウィリアムズが正気に覚めた時に何を思ったであろうか。

■ブラッケンは有罪か否か

ウィルクスは内部犯行説を推測しており、事件の前週火曜日に勤め始めたばかりのブラッケンが怪しいと考えていたようだ。ブラッケンは倉庫の鍵を管理しており、仲間と共謀して盗難、転売をしたというのがウィルクスの推理だった。ウィルクスの説明によると、ブラッケンは事件の前日は通常通り夕方7時に退社をして、事件当日は出勤したのが夕方の6時、昼間の行動に不審をもったウィルクスはブラッケンの届け出住所Water lane

の Mrs Goodman の元に徒弟 William Cook に手紙を託して向かわせたが、 ブラッケンはその住所には住んでいなかった。不信感を募らせたウィルク スは直截にブラッケンに、盗難をしたのはお前か、と尋ねたという。以前 リチャード・テイラーと共同事業を営んでいた時、奉公人や職人と騒動を 起こしてウィルクスが法的手段に訴えて困るとリチャードがこぼしていた 手紙が残っているが、その言葉を想起させる逸話である。

さてウィルクスの倉庫係ブラッケンは、前日夕方7時に退社をしてか ら事件当日夕方の6時まで、ほぼ24時間、何をしていたのか。ウィルク スには、仕事のあと聖バーソロミュー・フェアに行き朝4時までたっぷ り飲んで、それからパブに行き、仕事に来なかったのは、体調が悪くて出 勤できなかったからと、当初は釈明をしていた。しかしながら、ブラッケ ンの最終陳述によれば、「夕刻いつも通りに倉庫の鍵をウィルクスの女中 に戻し、仕事を引き上げると、Mrs Goodman の元で夕食をとり、その後 に若い友人の印刷者 John Rivers と一緒に聖バーソロミュー・フェアに繰 り出した。朝の4時まで遊んだ | と、ここまではウィルクスが聞いた話 とほぼ同じである。しかしまだ話は続き、友人と別れた後、ブラッケンは 「George Alley の女の元に転がり込んだ」という。ウィルクスには伏せて いた事実である。また住所についても Mrs Goodman のところでは食事を するだけで、住所は The Strand の No. 7 Change-court とウィルクスには 報告済みだったはずという新事実も判明する。

ブラッケンもウィリアムズも遊びに出かけた聖バーソロミュー・フェア とは、聖バーソロミューに因む祝祭で、その歴史は長い。1133年にはす でにヘンリー1世のチャーターに記録があり、聖バーソロミュー・ザ・グ レイト教会はロンドンで現存する最古の教会である。フェアの開催日と期 間については時代によって異なるが、事件の証人が9月6日はフェアの 最終日だったと語っており、聖バーソロミューの祝日8月24日からちょ うど2週間後にあたる。つまり 1809 年のフェアはおそらく2週間開催さ れ、9月6日はフェアを締めくくる「特別な」日であったにちがいない。

ウィルクスの被疑者2名のみならず、法廷に出廷した証人のうち4人ま でがフェアに出かけて明け方まで遊んでいた様子が浮かび上がる。聖バー ソロミューの祝祭には屋台や見世物小屋が立ち並び一大娯楽の場となって いたが、1855年に良俗にふさわしくない乱痴気騒ぎ防止を理由に中止に なった³⁴⁾。面白いことに、ウィリアムズの無罪を証明するために証言台 に立った人々が聖バーソロミュー・フェアでウィリアムズの姿を見たと 次々語っているにもかかわらず、本人の口からフェアという言葉は一度も 出ていないことである。あくまでもワインを飲むために馬車を止めたのは テンプル・バー (Temple Bar). その間に盗まれた馬車を探しに行ったのが スミスフィールド (Smithfield) で、12 時ごろに行き、その後、あちこち探 し回ったとしか語らない。実のところ、スミスフィールドはまさに聖バー ソロミュー・フェアの会場であり、テンプル・バーから 1km 程度。馬車 を置いて徒歩で移動するのもむずかしくはない。つまり、話は逆で、ウィ リアムズはフェアに行くためにテンプル・バーの馬車客待合所に馬車を駐 車し、フェアに、おそらくいそいそと出かけたと考えたほうが証人たちの 目撃証言とも一致する。雇用主には隠しておきたい後ろめたさがあったの だろうか。

紙の盗難にまつわり、次々に明らかになるのが印刷工房での作業工程である。夕方になってようやく顔を出したブラッケンは、紙の数と所在をウィルクスに問いただされて、さぞ戸惑ったのではないか。40 連あるはずなのに 21 連しかない。理由は「自分が留守の間に他の人が紙を湿らせるために持ち出したのではないか」と答えるしかない。「紙を湿らせる」とは、印刷工程のひとつで、インクの付着をよくするために事前に印刷用紙は湿らせなければならなかった。このブラッケンの言葉に対して、ウィルクスは反論して裁判官に曰く:"I had told him when that paper came in that the work for which that paper was to be used had not come in. We always wet the over night, and then we wet two or three reams; never so many as nineteen." つまり、9月7日の段階ではフォードリニア製のロイ

ヤル紙を使用する印刷作業にはまだ入っていなかったことになる。またウ ィルクスの工房では、紙を湿らせるのは印刷着手の前日で一晩かけたこと もわかる。また一度に印刷する用紙が2連から3連、つまりおよそ1000 から 1500 枚の印刷用紙を使用することも判明する。ロイヤル判であれば、 短辺の幅 50 cmなので 500 枚干す場合は 250m. ウィルクスの倉庫で使用 した干し竿が 268m であったことと照合すると、十分対応可能な勘定とな る。また一度に19連もの紙を水につけることはありえないというウィル クスの言葉は、ウィルクスの印刷工房の規模も示唆する。印刷機の使用時 間と印刷者の人数、印刷後の乾燥作業のスペースなど、人手と場所が不足 してしまう。タイミングを外すと、用紙が乾燥しすぎてしまいインクがの らなくなる、といった印刷の実情に基づいた反応である。裏を返せば、一 度に印刷できる容量はウィルクスの印刷所の規模がタイムズ (Times) 紙の ような大規模印刷所ではなかったことを示している。

■事件の真相:推定

事件の真相は不明だが証言を総合すると、概要を再構築できる。Hopkins Street で盗品の紙の一部を馬車に残したまま逃走した人物が真犯人である ことはほぼ間違いないだろう。

まずウィリアムズが馬車 177 を駐車した Temple Bar の客待ち場から賊 は馬車を盗む。Temple Bar Gate からウィルクスの印刷工房 89 Chancery Lane まで 1.3km, 馬車は時速 11km から 13km, 石畳のロンドンで人気 のない夜であれば、およそ10分で到着する距離である。バーソロミュー の祭りで人々が集まる Smithfield とは反対方向で、法曹関係の地域であ れば、夜半は静か、人目につかずに犯行を実行しやすかったのかもしれな い。19連の紙は重くかさばる。一人で運ぶのは困難であろう。夜警2: William Chapman が Tyler's Court で目撃したように、複数犯で2人組(あ るいは3人かもしれない)はウィルクスの倉庫の窓ガラスを外して侵入。手 慣れたやり口なのではないか。19連の紙を運び出し、馬車に乗せ、

Tyler's Court へ向かう。犯行に30-45分要したとして、89 Chancery Lane から Tyler's Court までは2.3 km, 現在車で7分の距離である。夜中にゆっくり目立たないように馬車を走らせても、20分程度で犯行現場から到着できるだろう。Tyler's Court と事故発生現場の Hopkins Street は徒歩2分ほどの至近距離。夜警2が馬車は45分ほど停車していたと証言し、ひとりの者が他方に早くしろ、と急かしていることから、盗品を隠したのが Tyler's Court ではないか。盗品の一部 11 連が Broad Street の印刷工房の Denham 氏に売却されているが、Tyler's Court から Broad Street まで(現 Broadwick Street、1854年のコレラの発生源となった井戸水ポンプがある場所)は、わずか 160m 程度の距離、歩いても2-3分である。窃盗犯が、いったん購入希望を聞いたうえで11連の紙を、「夕刻に」「荷台に乗せて」運んできたという証言とも符合する。Tyler's Courtの目撃時刻午前1時30分ごろ、ウィリアムズが聖バーソロミューには11時過ぎには到着していた目撃情報があるので、馬車盗難の時刻を仮に11時半としてもたっぷり120分あり、十分犯行が可能だといえる。

■両名の判決

年季奉公証文で謳われていた禁止項目「姦淫、飲み屋に徘徊すべからず、勤めに遅れることなかれ」等々の行動はすべてブラッケンにあてはまる違反事項であるから、「親方に損害を与えてはならず、親方の財産を無駄にしてはならず」という徒弟の義務条項も浮かび、ウィルクスの疑念と怒りの要因になっているのではないか。ブラッケンは住み込みでもなく徒弟奉公の契約をしているとは思えないが、行動規範として、また事業を守る親方ウィルクスには染みついた感覚だといえる。またもう一人の被疑者ウィリアムズの飲酒に Mrs Storey が目くじらを立てるのも宣なるかな。まさにディケンズの小説さながらの実話である。

法廷に参上した「その他ウィリアムズへの証人」の2名,「その他ブラッケンへの証人」3名が最後に、口々に「ウィリアムズはいい奴です」「ブ

ラッケンもいい奴です」と証言し、裁判は無事終了、両名の判決はNOT GUILTY である。

■被害者 Robert Wilks の世帯とその後

結局ウィルクスは訴えたものの. 真犯人は見つからず. ゆえに損害を補償 されることもない。盗難に遭った用紙をほぼ回収はしたものの、損害があ ったことに変わりはない。今回の調査でウィルクスの家族、印刷工房の実 態が多少なりとも明らかになった。父の名は John Wilks. 1800 年には年 季明けとなり印刷工房の親方となり、1803年の時点では2人の弟子と、 また喧嘩をしていたウィルクスの仲裁を頼む妻がおり、他に Richard Taylor と熟練工1名がいたので6名の世帯. 1809年には印刷工房に住み 込み徒弟奉公人 William Cook. そのほかにも植字工や印刷工が印刷には 必須なので、少なくとも各1名、そのほかに通い勤務の倉庫係1名、自 宅の女中1名が新たに今回の調査で浮上したメンバーである。

デジタル化されたデータベースは時空を超えて、200年前の見知らぬ印 刷者の声を届け、その立ち姿をおぼろげながら、しかし以前よりははるか に、その輪郭をはっきりと立ち上がらせてくれる。裁判が開かれた10年 後の 1819 年 1 月 30 日. Robert Wilks は破産申告. 4 月 29 日には競売が 実施されるという末路を辿ることになる。しかし、人生はここで終わらな い。ウィルクスの後半生についてはまた別稿であらためたい。

A Reconstruction of the Life of Robert Wilks, the Printer of Malory's Morte Darthur (1816): Part One.

Yuri FUWA

Notes

1816年のテクスト分析および出版史については拙稿参照: Fuwa, Yuri, "Reprinting Malory: Walker, Wilks and Southey", separately printed,

- Introduction to 7-volume *The Morte Darthur: A Collection of Early-Nineteenth-Century Editions* (Tokyo, Japan: Eureka Press, 2017). 1–46pp. [英文], 50–101pp.[和文]
- 2) Dibdin, T. F. *Reminiscences of a Literary Life*, 2vol., (London: J. Major, 1836), vol. 2., p. 748.
- 3) Raven, James. *The Business of Books: Booksellers and the English Book Trade*, 1450–1850 (New Haven, Conn.: Yale University Press, 2007), p. 21. 以降, Raven と省略。
- 4) London Metropolitan Archives: City of London, MS 11936/457/875413: "Insured: Robert Wilks, 89 Chancery Lane, printer."
- 5) The BRITISH BOOK TRADE INDEX [=BBTI] http://bbti.bodleian.ox.ac. uk/ 参照。
- 6) 本資料は筆者所蔵。画像撮影はすべて筆者が行った。
- 7) Goodwin, Gordon, and S. J. Skedd. "Howard, Charles, eleventh duke of Norfolk (1746–1815), politician." *Oxford Dictionary of National Biography*. 以下 *ODNB* と省略。September 23, 2004. Oxford University Press. Date of access 24 Jan. 2021.
 - https://www.oxforddnb.com/view/10.1093/ref:odnb/9780198614128.001.0001/odnb-9780198614128-e-13890
- 8) Robinson, John Martin. *The Dukes of Norfolk: A Quincentennial History* (Oxford and New York: Oxford University Press, 1982), p. 171, pp. 182–183.
- 9) トマス・テイラーの現代のプラトン研究における評価については納富信留 先生にご教示いただいた。『オクスフォード英国人名辞典』の評価も古典学 者ではなく "philosopher and translator" である。Louth, Andrew. "Taylor, Thomas (1758–1835), philosopher and translator." *Oxford Dictionary of National Biography.* September 23, 2004. Oxford University Press. Date of access 24 Jan. 2021.
 - https://www.oxforddnb.com/view/10.1093/ref:odnb/9780198614128.001.0001/odnb-9780198614128-e-27086
- 10) J.J.W.[Welsh]. A Brief Notice of Mr. Thomas Taylor, The celebrated Platonist, with a complete list of his published works (London: G. Balne, 1831), p. 10.
- 11) Taylor, Thomas, George Mills, and Kathleen Raine. *Thomas Taylor, the Platonist: Selected Writings* (1969; Princeton, NJ: Princeton University Press, 2020), p. 123.
- 12) ギリシア語の植字・印刷技術は Jonas Davis から学んだ可能性がある。Richard Taylor も徒弟時代にギリシア語を初めラテン語,古英語を

- 学んだという。Brock, W. H., and A. J. Meadows. *The Lamp of Learning:* Taylor & Francis and the Development of Science Publishing (London; Philadelphia: Taylor & Francis, 1984), p. 17.以下, Lamp of Learning と省略。
- 13) Jonas Davis についてLamp of Learning 参照。John Taylor と Richard Taylor は本書と ODNB 参照。Fell-Smith, Charlotte, and M. Clare Loughlin-Chow. "Taylor, John (1750–1826), hymn writer." Oxford Dictionary of National Biography. September 23, 2004. Oxford University Press. Date of access 24 Jan. 2021. https://www.oxforddnb.com/view/10.1093/ref:odnb/9780198614128.001.0001/odnb-9780198614128-e-27055 Brock, W. H. "Taylor, Richard (1781–1858), printer and naturalist." Oxford Dictionary of National Biography. September 23, 2004. Oxford University Press. Date of access 24 Jan. 2021.
 - https://www.oxforddnb.com/view/10.1093/ref:odnb/9780198614128.001.0001/odnb-9780198614128-e-27074
- 14) Lamp of Learning, p. 20. Richard Wilks は Robert Wilks の誤り。
- 15) St. Bride, Taylor Papers, "Taylor-Wilks Partnership". *Lamp of Learning*, p. 21.
- 16) St. Bride, Taylor Papers, "Taylor-Wilks Partnership". Lamp of Learning, p. 23.
- 17) St. Bride, Taylor Papers, "Taylor-Wilks Partnership". *Lamp of Learning*, pp. 23–24.
- 18) St. Bride, Taylor Papers, "Taylor-Wilks Partnership". 未刊行書簡 引用部は筆者が転写。
- 19) Lamp of Learning, p. 1, p. 6, p. 10.
- 20) Lamp of Learning, p. 25.
- 21) Lamp of Learning, p. 8.
- 22) Thomas, Peter D. G. "Wilkes, John (1725–1797), politician." Oxford Dictionary of National Biography. May 24, 2008. Oxford University Press. Date of access 22 Jan. 2021.
 - https://www-oxforddnb-com.kras1.lib.keio.ac.jp/view/10.1093/ref:odnb/9780198614128.001.0001/odnb-9780198614128-e-29410
- 23) 本画像の情報のほか、多々質問に応えてくださった Laurence Worms 氏に 謝意を表したい。
 - London Metropolitan Archive; Reference Number: COL/CHD/FR/02/1236-1243
- 24) Leitner, Lynda L. "Almon, John (1737–1805), bookseller and political journalist." Oxford Dictionary of National Biography. January 03, 2008. Oxford University Press. Date of access 22 Jan. 2021.
 - https://www-oxforddnb-com.kras1.lib.keio.ac.jp/view/10.1093/ref:odnb/9780198614128.001.0001/odnb-9780198614128-e-419

- 25) Lamp of Learning, p. 20.
- 26) 本稿の校正段階で新たな文書を発見した。ウィルクスが1790年にオルモンとの従弟関係を解消されたことを示す文書だが、詳細は次稿で扱うこととする。
- 27) Old Bailey Proceedings Online (www.oldbaileyonline.org, version 8.0, 18 January 2021), November 1809, trial of JOHN WILLIAMS DANIEL BRACKEN (t18091101–13).
- 28) Gaskell, Philip. *A New Introduction to Bibliography: The classic manual of bibliography* (1972; Delaware: Oak Knoll Press, 1995), p. 216. Lloyd-Jones, Roger. "Donkin, Bryan (1768–1855), inventor and engineer." *Oxford Dictionary of National Biography*. June 11, 2020. Oxford University Press. Date of access 4 Feb. 2021. https://www-oxforddnb-com.kras1.lib.keio.ac.jp/view/10.1093/ref:odnb/9780198614128.001.0001/odnb-9780198614128-e-7810
- 29) [Aristotle.] Taylor, Thomas. *The History of Animals of Aristotle, and his Treatise on Physiognomy, translated from the Greek* (London: Robert Wilks, 1809).
- 30) [Aristotle.] Taylor, Thomas. The treatises of Aristotle on the parts and progressive motion of animals, his problems; and his treatise on indivisible lines / Translated from the Greek. To which are added, the elements of the true arithmetic of infinites, &c. (London: Robert Wilks, 1810).
- 31) Raven, p. 308.
- 32) Bank of England, Inflation Calculator より 2020 年度比。 https://www.bankofengland.co.uk/monetary-policy/inflation/inflation-calculator
- 33) Raven, p. 299.
- 34) Webb, E.A. "Bartholomew Fair." *The Records of St. Bartholomew's Priory and St. Bartholomew the Great, West Smithfield: Volume 1.* (Oxford: Oxford University Press, 1921), pp. 298–317. *British History Online.* Web. 22 January 2021. http://www.british-history.ac.uk/st-barts-records/vol1/pp. 298–317.